

素直で綺麗な 骨組みをつくりたい！

構造家・鈴木 啓

朝倉幸子◎TH-1

illustration:Taco

■難波和彦ワールドに引き込まれて

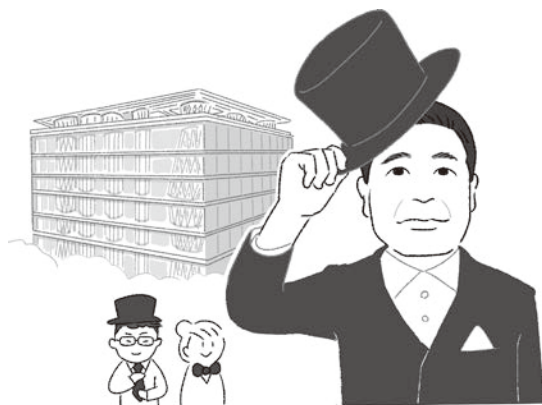
構造家・鈴木啓さんは1969年生まれ。神奈川県愛川町が故郷。神社や寺院の建築に優れた技量をもった「半原宮大工」が有名な場所だ。歴史ある建物に囲まれて育ったが、建築に進んだのは環境の影響ではないという…。であるが、選択したのは建築で、東京理科大学理工学部に進学し、研究科建築学専攻を修了してアトリエ構造家へと舵を取った。

建築学科に進学してよかったのかという迷いは、学部2年生までであった。その鈴木青年を建築にまっしぐらの気持ちにさせたのが、建築家 難波和彦先生であった。初めての授業は衝撃的だった。それまで知っていた【設計する人】とは違う【建築家】の存在を知る。難波先生の発する言葉が異次元のものだったから、授業中も他の学生の論評のときも、難波先生の口から出る言葉は決して聞き漏らすまいとピタリ側にいたという。魅力ある建築の話に加えて、ストレートな語り口や風貌、ファッションにも引き込まれた。難波和彦を敬愛する気持ちは今も変わらないようだ。この日の鈴木さんのコーディネートからは難波カラーは見えなかったけど、もしかしたら外出には着用しているのかもしれない。

難波先生から建築家とコラボする構造家という職種を知った鈴木さんは、4年生になると迷いながらも構造系の富澤稔研究室に入る。研究室では地震波解析に集中し、一つのテーマにじっくり取り組む姿勢を学んだというが、アトリエ構造事務所に絞って就職活動をした。その結果、難波先生と懇意な佐々木睦朗構造計画研究所に入った偶然も必然であったのかもしれないのです。

■佐々木睦朗師匠の元で脇目も振らず

佐々木睦朗先生が、構造美学と論理に秀でる構造家なのは誰もが知るところ。小耳に挟む所では、所



員への技術指導には厳しい師匠だ。鈴木さんも大いに愛の鞭を受けたのだったが、その試練の日々の中で先生から聞く建築の話は何ものにも変え難く鈴木さんを覚醒させた。「国内外の建築見学にも連れて行ってもらい充実した修行時代を過ごした」と語る。実務では「せんだいメディアテーク」（設計：伊東豊雄建築設計事務所）に18か月間常駐管理させてもらったことが大きな財産になった。「建築現場が造船工場へ置き換わったような、今までにない精度の鉄骨工事を体験できた」と言い、今でもそのとき現場でできた人との絆はつながっている。

最大限学ばせてもらい、5年間の在籍期間で退社した。その後、佐々木睦朗構造計画研究所の先輩の構造家の池田昌弘さんの事務所に1年在籍。それまで大きなプロジェクトばかりで、経験できなかった小規模の建物や木造建築にも携わり独立した。現在はアトリエ構造事務所の「鈴木 啓/ASA」を主宰し、所員を抱える構造家だ。事務所は建築家の若松均さん設計の併用住宅の一角に構える。住宅密集地に空き地を残し階高を低く抑えた綺麗な建築である。

独立してから「えんばーく一塩尻市市民交流センター」（設計：コンテンポラリーズ）での日本構造デザイン賞を受賞するなど、いくつかの賞を受ける。構造設計に対しての自信は積み重ねから得てきたという。これからも構造計画に力を入れた設計をして、単純明快な構成の綺麗な骨組みを目指す。建物の種別にかかわらず、使う人の顔が見えるものをつくりたい。人助けをする職業に憧れた幼い頃を思い出しながら、「構造家とは社会から求められ、世の中を幸せにする職能なのだ」と、やり甲斐を感じながら充実した日々を過ごしている。